

行動科学専攻分野

授業科目	講義題目	単位	担当教員氏名	開講 セメスター	曜日	講時	頁
数理行動科学特論Ⅰ	数理社会学	2	武藤 正義	集中(1学期)			1
数理行動科学研究演習Ⅰ	社会秩序の自己組織化とエージェント・ベースト・モデル	2	佐藤 嘉倫 瀧川 裕貴	1学期	水	3	3
数理行動科学研究演習Ⅱ	エージェント・ベースト・モデルによる自己組織性の解明	2	佐藤 嘉倫 瀧川 裕貴	2学期	水	3	4
数理行動科学研究演習Ⅲ	ベイズアプローチによる社会学の理論と実証	2	浜田 宏	1学期	水	2	5
計量行動科学特論Ⅱ	格差・不平等・リスクの社会学	2	佐藤 嘉倫	2学期	月	5	6
計量行動科学研究演習Ⅰ	「家族構造と子ども」の計量分析	2	木村 邦博	1学期	火	2	7
計量行動科学研究演習Ⅱ	社会調査法への認知科学的アプローチ	2	木村 邦博	2学期	火	2	8
計量行動科学研究演習Ⅲ	偏見の社会学	2	永吉 希久子	1学期	木	2	9
計量行動科学研究演習Ⅳ	社会的排除	2	永吉 希久子	1学期	金	2	10
計量行動科学研究演習Ⅳ	実践計量社会学	2	永吉 希久子	2学期	金	2	11
計量行動科学研究演習Ⅴ	リスクと社会的不平等	2	佐藤 嘉倫 松崎 瑠美	集中(1学期)			12
社会行動科学特論Ⅰ	リスクと防災の社会学	2	佐藤 嘉倫	1学期	月	5	13
社会行動科学特論Ⅱ	差別の社会学	2	永吉 希久子	2学期	木	2	14
課題研究 (行動科学)		4	佐藤 嘉倫 木村 邦博 浜田 宏 永吉 希久子	通年	月	3	

科目名：数理行動科学特論 I / Mathematical Behavioral Science(Advanced Lecture) I

曜日・講時：前期集中

学期：集中 (1 学期), **単位数：**2

担当教員：武藤正義 (非常勤講師)

講義コード：LM98828, **科目ナンバリング：**LHU-OS0601J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

数理社会学

2. Course Title (授業題目)：

Mathematical Sociology

3. 授業の目的と概要：

数理社会学を学ぶうえでポイントとなる数理モデルを解説する。

(1) 社会の数理モデルに関するイントロダクションの後 (第 1 講)、ミクロ-マクロリンクのシンプルなモデルとして閾値モデルから入り (第 2 講)、その発展型として流行のモデルや人口の離散ロジスティックモデルを紹介する (第 3 講)。これらのモデルにはカオスの考え方が反映されている (周期 3 はカオスを意味する)。カオスモデルには大国と小国のモデルなどの相互行為モデルもある (第 4 講)。

(2) 相互行為モデルの典型例であるゲーム理論の基礎をふまえたのち (第 5 講)、閾値モデルと似た社会的ジレンマ (N 人ゲーム) の行為連関と意図せざる結果を解説する (第 6 講)。特に、人びとに意識されない「行為の外部性」の蓄積が意図せざる結果を引き起こす。

(3) 社会的状況は社会的ジレンマや囚人のジレンマだけではない。一般的な状況において通用する社会理論モデルも求められる。そのひとつとして、利他志向と平等志向を旨とする社会的価値志向モデル (第 7 講) および二層ゲーム・モデルを紹介し、相互行為における規範的な命題を解説する (第 8 講)。さらにこのモデルと閾値モデルに関連し、行為者の異質性を伴う最適応答ダイナミクスを導入する (第 9 講)。

(4) 一般的な状況において通用する社会理論モデルを考えるうえでは、投票の数理から出発した社会的選択理論を知ることが有用である (第 10 講)。この理論は、「こう仮定したらどうなるか」を問う記述理論ではなく、「何が社会的に望ましいのか」を問う規範理論である。具体的には、アローの不可能性定理やリベラル・パラドクスを理解されたい (第 11 講)。これに関連してパラドクスには、嘘つきのパラドクスや自己言及のパラドクスが有名である (第 12 講)。これらは再帰性を内包した自己組織的な社会システム理論とも関係が深い。

(5) 自己組織性や複雑系に絡む社会システム理論の今日的なバージョンはネットワーク科学だろう。なかでもバランス理論 (第 13 講) とスモールワールド (第 14 講) は様々な文脈で用いられているのでこれらに触れたい。

以上の講義をふまえ、最後に総括として数理社会学とは何か、あるいは数理社会学のひとつのあり方を考える (第 15 講)。たとえば、意図せざる結果のような社会のメカニズムを理解することの意味を考えたい。

4. 学習の到達目標：

- (1) 閾値モデルおよびカオスモデル (流行のモデル / 大国と小国のモデル) を理解する。
- (2) ゲーム理論および社会的ジレンマのロジックを理解する。
- (3) 社会的価値志向 (利他志向と平等志向) および二層ゲーム・モデルを理解する。
- (4) アローの不可能性定理と自己言及のパラドクスを理解する。
- (5) 社会ネットワーク分析の基本 (バランス理論とスモールワールド) を理解する。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション
2. 閾値モデル
3. 流行のモデル
4. 大国と小国のモデル
5. ゲーム理論の基礎
6. 社会的ジレンマ
7. 利他志向と平等志向
8. 二層ゲーム・モデル
9. 異質性と最適応答ダイナミクス
10. 投票の数理
11. アローの不可能性定理
12. 自己言及のパラドクス
13. バランス理論 (符号付ネットワーク)
14. スモールワールド・ネットワーク
15. 総括：数理社会学とは何か

6. 成績評価方法：

授業課題 [40%]、レポート [60%]

7. 教科書および参考書：

参考書：土場学ほか編『社会をモデルでみる』勁草書房

8. 授業時間外学習：

集中講義なので、よく復習して授業内容はその日のうちに理解する。

9. その他：

科目名：数理行動科学研究演習Ⅰ／Mathematical Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅰ

曜日・講時：前期 水曜日 3講時

学期：1学期， 単位数：2

担当教員：佐藤 嘉倫・瀧川 裕貴（教授）

講義コード：LM13307， 科目ナンバリング：LHU-OS0603J， 使用言語：日本語

1. 授業題目：

社会秩序の自己組織化とエージェント・ベースト・モデル

2. Course Title（授業題目）：

Self-organization of Social Order and Agent-based Models

3. 授業の目的と概要：

人々が自発的に秩序（協力行動など）を生み出している社会現象がある。本演習では、いくつかの論文を輪読して、これらの現象を分析する方法を理解する。

4. 学習の到達目標：

進化ゲーム理論やエージェント・ベースト・モデルが社会学にいかなる貢献をするのか理解する。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション（1）
2. イントロダクション（2）
3. 社会秩序概念の検討（1）
4. 社会秩序概念の検討（2）
5. 自己組織性の理論的検討（1）
6. 自己組織性の理論的検討（2）
7. 自己組織性の経験的分析（1）
8. 自己組織性の経験的分析（2）
9. 進化ゲーム理論（1）
10. 進化ゲーム理論（2）
11. 計算社会学入門（1）
12. 計算社会学入門（2）
13. エージェント・ベースト・モデル（1）
14. エージェント・ベースト・モデル（2）
15. ここまで演習で取り上げたトピックを再検討し、エージェント・ベースト・モデルによる社会秩序の自己組織メカニズムの分析について探究する。

6. 成績評価方法：

（ ）筆記試験 [%]・(○) リポート [50%]・(○) 出席 [50%]

7. 教科書および参考書：

開講時に指示する。

8. 授業時間外学習：

演習中の議論に積極的に参加できるように、事前に関連文献に目を通すなど予習をしておくこと。

9. その他：

オフィスパワー：水曜日第5講時（事前に予約すること）
第6セメスターの行動科学演習と併せて参加すること

科目名：数理行動科学研究演習Ⅱ／ Mathematical Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅱ

曜日・講時：後期 水曜日 3講時

学期：2 学期， 単位数：2

担当教員：佐藤 嘉倫, 瀧川 裕貴（教授）

講義コード：LM23308， 科目ナンバリング：LHU-OS0604J， 使用言語：日本語

1. 授業題目：

エージェント・ベースト・モデルによる自己組織性の解明

2. Course Title（授業題目）：

Analysis of Self-organization and Agent-based Models

3. 授業の目的と概要：

エージェント・ベースト・モデルの手法を修得し、自分で自己組織性を解明する。

4. 学習の到達目標：

前期の議論を踏まえて、実際にエージェント・ベースト・モデルを構築して、社会の自己組織性を自分で解明できるようになる。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション
2. プログラミング入門（1）
3. プログラミング入門（2）
4. プログラミング入門（3）
5. 研究テーマの決定とグループ分け
6. グループ別の進行状況報告と検討（1）
7. グループ別の進行状況報告と検討（2）
8. グループ別の進行状況報告と検討（3）
9. グループ別の進行状況報告と検討（4）
10. グループ別の進行状況報告と検討（5）
11. グループ別の進行状況報告と検討（6）
12. グループ別の進行状況報告と検討（7）
13. グループ別の進行状況報告と検討（8）
14. グループ別の進行状況報告と検討（9）
15. 各グループによる最終的な研究報告

6. 成績評価方法：

（ ）筆記試験 [%]・(○) リポート [50%]・(○) 出席 [50%]

7. 教科書および参考書：

開講時に指示する。

8. 授業時間外学習：

グループに分かれてプログラミングを行うので、積極的にグループワークに参加すること。

9. その他：

オフィスパワー：水曜日第5講時（事前に予約すること）
第5セメスターの行動科学演習と併せて参加すること

科目名：数理行動科学研究演習Ⅲ／ Mathematical Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅲ

曜日・講時：前期 水曜日 2講時

学期：1 学期, **単位数：**2

担当教員：浜田 宏 (教授)

講義コード：LM13209, **科目ナンバリング：**LHU-OS0605J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

ベイズアプローチによる社会学の理論と実証

2. Course Title (授業題目)：

Sociological Theory and Bayesian Statistics

3. 授業の目的と概要：

- 1) 社会現象を数理モデルとデータを使って説明する方法の基礎を学ぶ.
- 2) 興味深い問題をどうやって定式化するかを演習を通して学ぶ. 見本となる研究を参考にして「問題を構成する力」の基礎を涵養する.

4. 学習の到達目標：

Stan を使ったベイズ統計の分析手法を習得する
現象の数学的表現を習得する
日常生活の中に潜む数学的構造を見抜く観察力を身につける

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション 分布生成モデル
2. ベイズ統計モデルリング 1 ベイズ推定と MCMC
3. ベイズ統計モデルリング 2 確率統計のおさらい
4. ベイズ統計モデルリング 3 R と Stan の導入
5. ベイズ統計モデルリング 4 R と Stan の導入
6. ベイズ統計モデルリング 5
7. Stan による分析 1 モデル式の書き方
8. Stan による分析 2 回帰
9. Stan による分析 3 階層モデル
10. Stan による分析 4 階層モデル
11. Stan による分析 5 分布生成モデルとの接合
12. Stan による分析 6 分布生成モデルとの接合
13. Stan による分析 7
14. Stan による分析 8
15. まとめと総括

6. 成績評価方法：

レポート [50%], 出席 [30%], その他 (授業時間内での報告や質問と、報告・レポートに至るまでの過程) [20%]

7. 教科書および参考書：

教科書：松浦健太郎, 2016, 『Stan と R で統計モデリング』共立出版

参考書：久保拓哉, 2012, 『データ解析のための統計モデリング入門』岩波書店.

Gelman et al. 2013, Bayesian Data Analysis, Third Edition, CRC Press.

その他の参考書は適宜指示する

8. 授業時間外学習：

毎週, テキストの該当範囲を事前に読んでくること.

9. その他：

本演習では R と Stan を使用するので, 実行環境を整えたノート PC を毎回持参すること.

科目名：計量行動科学特論Ⅱ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Lecture)Ⅱ

曜日・講時：後期 月曜日 5講時

学期：2 学期, **単位数：**2

担当教員：佐藤 嘉倫 (教授)

講義コード：LM21507, **科目ナンバリング：**LHU-OS0608J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

格差・不平等・リスクの社会学

2. Course Title (授業題目)：

Sociology of Disparity, Inequality, and Risk

3. 授業の目的と概要：

教科書に収録されている論文の中から講義テーマに合うものを取り上げて、参加者同士の議論によって理解を深めていく。

4. 学習の到達目標：

現代社会の格差と不平等の問題を社会階層論の視点から理解することを目指す。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション
2. ひとり親家庭と教育達成 (教科書 16 章)
3. 教育達成過程の階層差 (教科書 17 章)
4. 学校から職業への移行 (1) (教科書 5 章)
5. 学校から職業への移行 (2) (教科書 5 章)
6. 若年労働市場 (1) (教科書 4 章、6 章)
7. 若年労働市場 (2) (教科書 4 章、6 章)
8. 転職 (1) (教科書 1 章、2 章、3 章)
9. 転職 (2) (教科書 1 章、2 章、3 章)
10. 女性の就労 (1) (教科書 8 章、11 章)
11. 女性の就労 (2) (教科書 8 章、11 章)
12. ライフイベント (教科書 9 章、10 章)
13. 高齢者の格差 (教科書 13 章)
14. ライフスタイル (教科書 14 章、15 章)
15. 今までの講義で取り上げたテーマを振り返り、現代日本における格差、不平等、リスクの問題を総合的に検討する。

6. 成績評価方法：

() 筆記試験 [%]・(○) リポート [60%]・(○) 出席 [40%]

7. 教科書および参考書：

教科書：佐藤嘉倫・尾嶋史章 (編)『格差と多様性』(現代の階層社会 第 1 巻)、東京大学出版会。

参考書：石田浩・近藤博之・中尾啓子 (編)『趨勢と比較』(現代の階層社会 第 2 巻)、東京大学出版会。

斎藤友里子・三隅一人 (編)『流動化の中の社会意識』(現代の階層社会 第 3 巻)、東京大学出版会。

8. 授業時間外学習：

教科書の該当箇所を講義の前に読んでおくこと。

9. その他：

オフィスアワー：水曜日第 5 講時 (事前に予約すること)

科目名：計量行動科学研究演習Ⅰ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅰ

曜日・講時：前期 火曜日 2講時

学期：1学期, **単位数：**2

担当教員：木村 邦博（教授）

講義コード：LM12208, **科目ナンバリング：**LHU-OS0609J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

「家族構造と子ども」の計量分析

2. Course Title (授業題目)：

Quantitative Analysis of Family Structure and Children

3. 授業の目的と概要：

- (1) 「家族構造と子ども」に関する計量行動科学的研究の動向を把握し、今後の展開を展望する。
- (2) 学術的な英語文献を読む力をつけるとともに、行動科学的な思考力を養う。
- (3) 多変量解析を用いた計量的研究を理解し、自分でも実施する力を身につける。

4. 学習の到達目標：

- (1) 「家族構造と子ども」に関する行動科学的研究の動向を把握し、今後の展開を展望する。
- (2) 学術的な英語文献を読む力をつけるとともに、行動科学的な思考力を養う。
- (3) 多変量解析を用いた計量的研究を理解し、自分でも実施する力を身につける。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. 授業計画の説明
2. 家族構造と子どもの読解力 (Park 2007)：内容理解
3. 家族構造と子どもの読解力 (Park 2007)：方法論的検討（重回帰分析）
4. 家族構造と子どもの教育アスピレーション (Park 2008)：内容理解
5. 家族構造と子どもの教育アスピレーション (Park 2008)：方法論的検討（ロジスティック回帰分析）
6. 離婚と社会移動 (Biblarz and Raftery 1993)：内容理解
7. 離婚と社会移動 (Biblarz and Raftery 1993)：方法論的検討（ログリニアモデル）
8. 家族構造と子育てスタイル (Chan and Koo 2011)：内容理解
9. 家族構造と子育てスタイル (Chan and Koo 2011)：方法論的検討（潜在クラスモデル）
10. 離婚と心理的健康 (Amato and Sobolewski 2001)：内容理解
11. 離婚と心理的健康 (Amato and Sobolewski 2001)：方法論的検討（構造方程式モデリング）
12. 家族構造と婚姻前出産 (Wu and Martinson 1993)：内容理解
13. 家族構造と婚姻前出産 (Wu and Martinson 1993)：方法論的検討（イベントヒストリー分析）
14. 家族政策、家族構造と子どもの成績 (Pong, et al. 2003)：内容理解
15. 家族政策、家族構造と子どもの成績 (Pong, et al. 2003)：方法論的検討（マルチレベル分析）

6. 成績評価方法：

期末レポート [50%]、平常点（授業時間内での報告・質問の内容や報告・レポートに至るまでの過程） [50%]

7. 教科書および参考書：

American Sociological Review, Journal of Marriage and Family, Demographic Research などの学術誌に掲載された論文で指定されたもの（「授業内容の詳細」欄に掲載）を、参加者各自が「電子ジャーナル」からダウンロードする。

8. 授業時間外学習：

- (1) 演習の時間に取り上げる文献を事前に読んで検討しておく。
- (2) 担当の文献に関する報告の準備をする。
- (3) 関連文献を検索して読み、あわせて検討する。

9. その他：

- (1) 専門社会調査士資格認定標準科目Ⅰに対応。
- (2) 受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。

科目名：計量行動科学研究演習Ⅱ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅱ

曜日・講時：後期 火曜日 2講時

学期：2学期, **単位数：**2

担当教員：木村 邦博（教授）

講義コード：LM22209, **科目ナンバリング：**LHU-OS0610J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

社会調査法への認知科学的アプローチ

2. Course Title (授業題目)：

Cognitive Approaches to Survey Methodology

3. 授業の目的と概要：

1980年代頃から、認知科学・認知心理学の方法や成果をもとに社会調査法に反省・検討を加えようという試みが行われるようになってきた。そのひとつの流れが、CASM (Cognitive Aspects of Survey Methodology) と呼ばれる研究プロジェクトである。このプロジェクトの研究動向（先駆的・古典的研究も含む）についてレビューするとともに、そこでの知見を社会調査の現場（企画・準備・実査から分析や成果報告に至るまでのプロセス）に実践的に生かす道を探求する。あわせて、センシティブな質問などを用いる場合の倫理的問題とそれへの対処法などについても考える。

4. 学習の到達目標：

認知科学等の知見を社会調査の企画・準備・実査・分析・報告・倫理向上に活かす。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. 授業計画の説明
2. 世帯調査におけるカバレッジ誤差 (Martin 1999)
3. コーディングのエラー (Collins and Courtenay 1985)
4. 事実質問における不明確な言葉 (Fowler 1992)
5. 出来事の想起 (Neter, et al. 1964)
6. 事実質問における回答選択肢 (Schwarz, et al. 1985)
7. センシティブな質問 (Tourangeau, et al. 1996)
8. 無回答・回答拒否 (Groves, et al. 2006)
9. 質問順序効果 (Schwarz, et al. 1991)
10. 評定尺度におけるラベルの影響 (O'Muircheartaigh, et al. 1995)
11. 評定尺度における方向性と強度 (Krosnick and Berent 1993)
12. プリテストの新技术 (Oksenberg, et al. 1991)
13. 調査員効果 (Schuman and Converse 1971)
14. 調査員変動 (Kish 1962)
15. インフォームドコンセントの方法 (Singer 1978)

6. 成績評価方法：

期末レポート [50%]、平常点（授業時間内での報告・質問の内容や報告・レポートに至るまでの過程） [50%]

7. 教科書および参考書：

Public Opinion Quarterly, Journal of the American Statistical Association, Journal of Official Statistics, American Sociological Review などの学術誌に掲載された論文で指定されたものを、参加者各自が「電子ジャーナル」からダウンロードする。

8. 授業時間外学習：

- (1) 演習の時間に取り上げる文献を事前に読んで検討しておく。
- (2) 担当の文献に関する報告の準備をする。
- (3) 関連文献を検索して読み、あわせて検討する。

9. その他：

- (1) 専門社会調査士資格認定標準科目Hに対応。
- (2) 受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。

科目名：計量行動科学研究演習Ⅲ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅲ

曜日・講時：前期 木曜日 2 講時

学期：1 学期， 単位数：2

担当教員：永吉 希久子（准教授）

講義コード：LM14211， 科目ナンバリング：LHU-OS0611J， 使用言語：日本語

1. 授業題目：

偏見の社会学

2. Course Title (授業題目)：

Sociology of prejudice

3. 授業の目的と概要：

この授業では、偏見についての基礎文献および最新の研究の知見を学ぶことにより、偏見が生じるメカニズムを解明するために必要となる知識を得ることを目的としている。また、受講生間のディスカッションを通じて、研究を発展させるための方策を考える。

また、授業の後半では自分自身でリサーチプロポーザルを作成し、それにもとづいた分析、論文の執筆を行ってもらう。これによって、論文作成にかかわる一連のスキルを身につける。

4. 学習の到達目標：

- 1) 偏見の生じるメカニズムについて、理論にもとづいて説明できるようになる。
- 2) リサーチプロポーザルを作成し、それにもとづいて一本の論文を書くまでのプロセスを身につける。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

授業の前半は、Literature review を通じて、偏見研究でこれまで得られている知見を学ぶ。授業の後半では、リサーチプロポーザルを作成し、それにもとづいてデータ分析を行い、一本の論文にまとめる。

Literature review で読む文献は、The SAGE Handbook of Prejudice, Stereotyping and Discrimination に収録されているものを中心とする。初回に担当を割り振り、それぞれが担当の論文について紹介し、全体でそれをもとにした議論を行う。

具体的なスケジュールは初回の授業で示す。

6. 成績評価方法：

授業での発表（30%）、最終レポート（70%）

7. 教科書および参考書：

Dovidio, J. F., M. Hewstone, P. Glick and V. M. Esses. 2010. The SAGE Handbook of Prejudice, Stereotyping and Discrimination. Sage.

8. 授業時間外学習：

初回の授業で指示した文献を各回の授業までに読んでくることが求められる。

また、リサーチプロポーザルの作成やそれにもとづいた分析は、授業時間外の作業を必要とする。

9. その他：

科目名：計量行動科学研究演習Ⅳ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅳ

曜日・講時：前期 金曜日 2講時

学期：1 学期, **単位数：**2

担当教員：永吉 希久子 (准教授)

講義コード：LM15211, **科目ナンバリング：**LHU-OS0612J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

社会的排除

2. Course Title (授業題目)：

Sociology of Social Exclusion

3. 授業の目的と概要：

授業目的：近年、貧困や格差の問題を、社会参加からの排除としてとらえる「社会的排除」という概念が注目されている。この授業では社会的排除についての基礎的文献の読解と討論を通して、社会的排除に関する基礎的理論を理解し、現代日本における社会的排除の実態を知るとともに、社会的排除が生じるメカニズムやその抑止の可能性について検討する。

授業内容・方法：授業の前半では、社会的排除についての全般的な理論を学び、後半では、個々の事例や対策として行われている政策について取り上げ、検討する予定である。

4. 学習の到達目標：

- 1) 社会的排除の概念の内容とその特徴を理解し、説明できるようになる。
- 2) 社会的排除が生じるメカニズムについての理論を理解し、説明できるようになる。
- 3) 社会的排除の理論を用いて、日本社会における格差の問題とそれが生じるメカニズムについて説明できるようになる。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は3部構成になっている。第一部(1～4回目)では、社会的排除の概念についての理解を深める。第二部(6～10回)では、ホームレス、若年労働者、高齢者、貧困地域の社会的排除を扱った文献の講読を通して、それぞれの対象が置かれている状況を把握するとともに、どのようなメカニズムで排除が生じているのかを知る。特に、学校、家族、職場、社会保障制度が、個々の対象の社会的排除にどのように関連しているのかを考える。第三部(11～14回)では、日本において政府や民間が社会的排除の抑止のために行っているプログラムについて学び、評価する。

授業では、グループごとに担当回を決め、初回授業で指示された文献について紹介を行ってもらう。
それをもとに、全体で議論する。

スケジュールは以下の予定である。

1. イントロダクション
2. 【理論編】社会的排除とは何か
3. 【理論編】シティズンシップと社会的排除
4. 【理論編】福祉国家と社会的排除
5. 【理論編】ライフコースと社会的排除
6. 【事例編】不安定就労
7. 【事例編】子ども
8. 【事例編】高齢者
9. 【事例編】ホームレス
10. 【事例編】剥奪地域
11. 【政策編】福祉政策
12. 【政策編】労働市場政策
13. 【政策編】教育政策
14. 【政策編】都市政策
15. まとめ

6. 成績評価方法：

授業での発表(30%)、ディスカッションへの参加(20%)、最終レポート(50%)

7. 教科書および参考書：

初回授業で指示する。

8. 授業時間外学習：

授業までに各回の文献を読み、自分なりの疑問点や批判点を挙げておくことが求められる。
また、日本における社会的排除の状況を、統計等を用いて調べておくことが、最終レポート作成に必要となる。

9. その他：

科目名：計量行動科学研究演習Ⅳ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅳ

曜日・講時：後期 金曜日 2講時

学期：2学期, **単位数：**2

担当教員：永吉 希久子 (准教授)

講義コード：LM25211, **科目ナンバリング：**LHU-OS0612J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

実践計量社会学

2. Course Title (授業題目)：

Quantitative Sociology

3. 授業の目的と概要：

計量的な社会学研究を行うためには、理論についての理解に加え、理論を計量分析可能な形で検証するための操作化の手続きや分析方法についての理解が非常に重要になる。この授業では、計量的な手法で行われた研究論文を講読することにより、そこでどのような操作化が行われているのかを学ぶ。また、そこで行われている分析をレプリケートすることで、実際にデータを分析するためのデータのハンドリングや、分析手法の習得を行う。これによって、自分自身で計量的な手法を用いた論文を書くための実践的な知識を身に付けることが、この授業の目的である。

授業は分析方法の説明の回、文献内容の理解の回、レプリケートの回に分けられる。レプリケートは無料の統計ソフト R を用いて行う。R の使い方については第二回の授業で説明するため、事前の知識は必要としない。

4. 学習の到達目標：

- ① 社会学理論を計量的に分析する際の、適切な操作化ができるようになる。
- ② 計量社会学で用いられる基本的・発展的な分析手法を習得し、R を用いて自分で分析ができるようになる。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は分析方法の説明の回、文献内容の理解の回、レプリケートの回に分けられる。レプリケートは無料の統計ソフト R を用いて行う。R の使い方については第二回の授業で説明するため、事前の知識は必要としない。

具体的なスケジュールは以下を予定しているが、変更の可能性がある。

1. イントロダクション
 2. R の使い方の基礎
 3. 家族と規範：岩井・保田 (2008)
 4. 重回帰分析を用いたレプリケート (PC 使用)
 5. 階層帰属意識：数土 (2012)
 6. 多項ロジスティック回帰分析を用いたレプリケート (PC 使用)
 7. マルチレベル分析
 8. 福祉国家：池田 (2016)
 9. マルチレベル分析を用いたレプリケート (PC 使用)
 10. 固定効果モデル
 11. メンタルヘルス：中澤 (2010)
 12. 固定効果モデルを用いたレプリケート (PC 使用)
 13. イベントヒストリー分析
 14. 職業移動：石田 (2014)
 15. イベントヒストリー分析を用いたレプリケート (PC 使用)
- 6. 成績評価方法：**
授業での課題 (40%)、最終レポート (60%)
- 7. 教科書および参考書：**
授業予定参照。参考文献は授業中に適宜指示する。
- 8. 授業時間外学習：**
テキストを事前に読み、課題を行うことが求められる。
また、用いた分析方法についての復習を行うことが、最終レポート作成に必要な。
- 9. その他：**
重回帰分析や多項ロジスティック回帰の結果が読めることを前提としているので、これらの手法について未習の場合は自分で学ぶなどしてから参加してほしい。

科目名：計量行動科学研究演習Ⅴ／ Quantitative Behavioral Science(Advanced Seminar)Ⅴ

曜日・講時：前期集中

学期：集中（1学期）、単位数：2

担当教員：佐藤 嘉倫、松崎 瑠美（教授、助教）

講義コード：LM98829、科目ナンバリング：LHU-OS0613J、使用言語：日本語

1. 授業題目：

リスクと社会的不平等

2. Course Title（授業題目）：

Risk and Social Inequality

3. 授業の目的と概要：

6月か7月に5日間続けて東北大学においてスタンフォード大学貧困と不平等研究センターの大学学生と共に研究報告をする。

4月13日午後1時～午後2時30分に文学部棟621演習室において説明会・選考会を行うので、参加希望者は必ず出席すること。

4. 学習の到達目標：

現代社会におけるリスク、安全、安心、不平等の問題を多面的に理解できる能力を身につけることを目的とする。

リスク、安全、安心、不平等に関する研究を英語で報告する。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション
2. 参加学生による報告（1）
3. 参加学生による報告（2）
4. 参加学生による報告（3）
5. 参加学生による報告（4）
6. 参加学生による報告（5）
7. 参加学生による報告（6）
8. 参加学生による報告（7）
9. 参加学生による報告（8）
10. 参加学生による報告（9）
11. 参加学生による報告（10）
12. 参加学生による報告（11）
13. 参加学生による報告（12）
14. 参加学生による報告（13）
15. これまでの報告を振り返り、総括的な議論をする。

6. 成績評価方法：

（ ）筆記試験 [％]・（○）レポート [30%]・（○）出席 [70%]

7. 教科書および参考書：

特になし。

8. 授業時間外学習：

自分の報告の準備をしっかりとすること。また他の人の報告に対しても積極的にコメントや質問ができるように準備しておくこと。

9. その他：

オフィスアワー：水曜日第5講時（事前に予約すること）

グローバル安全学トップリーダー育成プログラムのCラボ研修（人文社会科学基盤研修）を兼ねる。

科目名：社会行動科学特論 I / Social Behavioral Science(Advanced Lecture)I

曜日・講時：前期 月曜日 5 講時

学期：1 学期, **単位数：**2

担当教員：佐藤 嘉倫 (教授)

講義コード：LM11507, **科目ナンバリング：**LHU-OS0614J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

リスクと防災の社会学

2. Course Title (授業題目)：

Sociology of Risk and Disaster Prevention

3. 授業の目的と概要：

教科書に収められている論文や関連論文を踏まえて次のようなテーマなどを扱う予定である。

- ・ 社会関係資本と防災
- ・ 消防団のあり方
- ・ 防災とコミュニティ
- ・ 災害ボランティア

4. 学習の到達目標：

自然災害のリスクを低減するためには、自然科学や工学だけでなく人間社会を対象とした社会科学の視点も必要となる。本講義では、社会科学とりわけ社会学の理論や方法論を用いて自然災害のリスクを低減し防災を実現する方策を検討する。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

1. イントロダクション 本講義の概略を解説する。
2. 教科書 (1) 第 2 章を題材に防災をめぐるローカル・ノレッジのあり方を検討する。
3. 教科書 (1) 第 3 章を題材に防災コミュニティと町内会の検討をする。
4. 教科書 (1) 第 4 章を題材に都市部町内会における東日本大震災への対応に対する理解を深める。
5. 教科書 (1) 第 5 章を題材に災害ボランティアと支えあいのしくみづくりを分析する。
6. 教科書 (1) 第 6 章を題材に被災者の生活再建の社会過程に関する理解を深める。
7. 教科書 (1) 第 7 章を題材に災害弱者の支援と自立の問題を検討する。
8. 教科書 (1) 第 9 章を題材に防災ガバナンスの可能性と課題を議論する。
9. ここまで講義で取り上げてきたテーマを全体的に考察し、防災のための地域社会づくりについて議論する。
10. 教科書 (2) 第 1 章を題材に社会関係資本概念の初歩的な理解をする。
11. 教科書 (2) 第 2 章を題材に社会科学における社会関係資本概念の検討をする。
12. 前回に続いて、教科書 (2) 第 2 章を題材に社会科学における社会関係資本概念をさらに深く検討する。
13. 教科書 (2) 第 3 章を題材に関東大震災における社会関係資本と復興との関係を検討する。
14. 教科書 (2) 第 4 章を題材に阪神淡路大震災における社会関係資本と復興との関係を検討する。
15. 今まで講義で取り上げてきたテーマを振り返って、防災のための社会関係資本構築に向けた方策を検討する。

6. 成績評価方法：

() 筆記試験 [%]・(○) リポート [60%]・(○) 出席 [40%]

7. 教科書および参考書：

- (1) 吉原直樹 (編), 2012, 『防災の社会学ー防災コミュニティの社会設計に向けて』(第 2 版), 東信堂.
- (2) ダニエル・アルドリッチ, 2015, 『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か: 地域再建とレジリエンスの構築』, ミネルヴァ書房.

その他の関連論文については適宜講義中に紹介する。

8. 授業時間外学習：

教科書の該当箇所や関連文献を授業前に読んでおくこと。

9. その他：

オフィスアワー：水曜日第 5 講時 (事前に予約すること)

科目名：社会行動科学特論Ⅱ／ Social Behavioral Science(Advanced Lecture)Ⅱ

曜日・講時：後期 木曜日 2講時

学期：2学期, **単位数：**2

担当教員：永吉 希久子 (准教授)

講義コード：LM24210, **科目ナンバリング：**LHU-OS0615J, **使用言語：**日本語

1. 授業題目：

差別の社会学

2. Course Title (授業題目)：

Sociological Theory of Discrimination

3. 授業の目的と概要：

今日の日本においては、ヘイトスピーチ規制のための法律の制定が検討されるなど、差別問題が重要な社会問題となっている。私たちの多くは、差別が間違っただけという規範を共有している。にもかかわらず、その根絶は容易ではない。この授業では、心理学や社会学などにおける差別研究の知見を紹介しつつ、差別はなぜ生じ、なぜなくなるのかを考える。

4. 学習の到達目標：

- 1) 現代社会で生じている差別のさまざまな形態について説明できるようになる。
- 2) 今日の日本において差別が生じる要因について、理論にもとづいた自分なりの見解を持ち、議論できるようになる。

5. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は講義形式で行うが、受講生のディスカッションを適宜行うので、積極的な参加が求められる。
以下のスケジュールで行う予定であるが、授業の進度や受講生の関心に応じて変更する場合がある。

第1回 イン트로ダクション：差別とは何か

第2回 【理論編】パーソナリティ論

第3回 【理論編】社会的カテゴリ化

第4回 【理論編】ステレオタイプ

第5回 【理論編】集団間関係

第6回 【理論編】メディアの影響

第7回 【理論編】接触理論

第8回 【理論編】偏見論への批判

第9回 【理論編】差別の制度化

第10回 【理論編】反差別の法制化とその効果

第11回～第14回 具体的な事例についての考察

第15回 まとめ

6. 成績評価方法：

毎回のコメントシート (30%)、最終レポート (70%) をもとに評価する

7. 教科書および参考書：

教科書は指定しない。

参考書は授業の中で適宜紹介する。

8. 授業時間外学習：

普段から新聞を読むなどして、社会の中で起こっていることに関心を持つておくこと。

授業の復習をしておくこと。

9. その他：